

焼土が認められたことから考えると、住居跡が機能していた（使用していた）時点では地床炉ならびに石組炉が存在した可能性がある。そして住居跡が廃絶し、機能を失なった後に炉を破壊し、第4号土壤（破壊したときに出来た穴）を構築したとも考えられよう。

遺構の年代決定－当住居跡からは住居北隅より出土した一括土器と第4号土壤内出土の資料が良好である。

堆積土－住居内の埋土は基本的に三枚に分けられた。下記の「第13表 第3号住居跡内埋土一覧表」を参照願いたい。

第13表 八幡原No.26遺跡第3号住居跡内埋土一覧表

番号	土色	備考
1	黒褐色土	表土
2	黒褐色微砂質土	
3	暗黒褐色土	少量の木炭粒を含む
4	暗茶褐色微砂質土	多量の木炭粒を含む

2 第2号住居跡（第42図、第44図）

第4層（黄褐色シルト）を探り凹めて構築しているもので、第1号住居跡と重複している。

平面プラン－は北東部に南壁部が第1号住居跡に切られてるので明確にできないが、ほぼ隅が丸味をおびた隅丸方形プランを呈するものとみられる。南北（推定）2.6m、東西（推定）2.4mで主軸をほぼ南北に向く。炉は確認できなかった。

床－特に直められた痕跡は認められなかった。

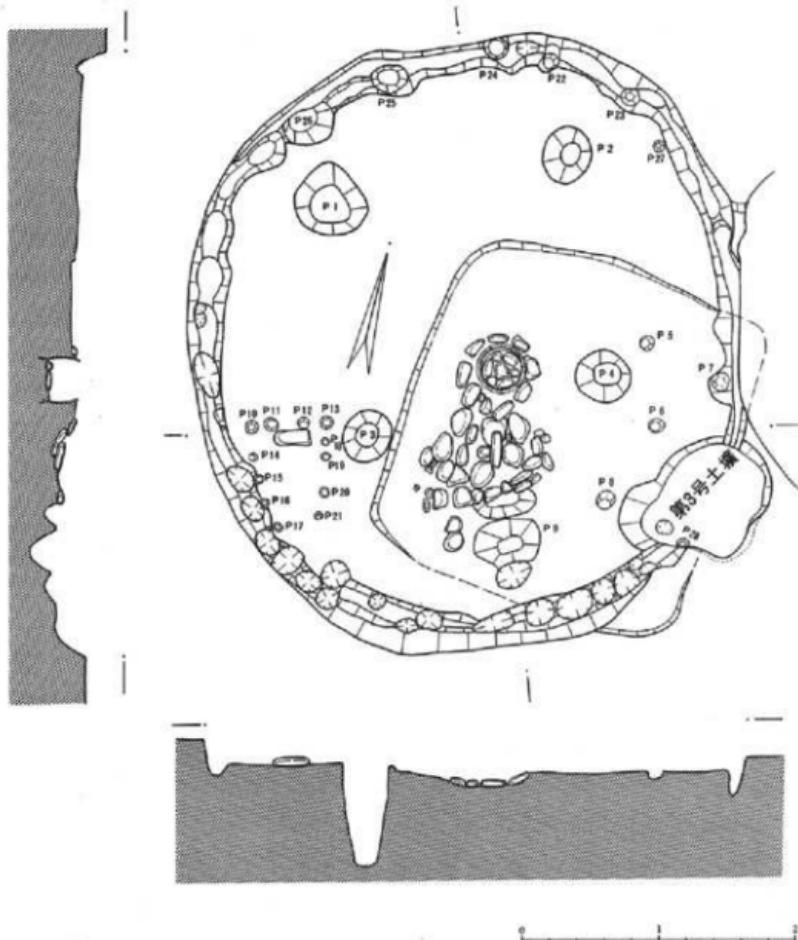
柱穴－としては第1号住居跡の複式炉によって破壊されているので不明であるが、東側に確認されたP5～P8の4本のビットから考えると、不規則に中央に位置する公算が強い。

壁－は南東壁から切られているので明確にできないが、北壁3cm位、西壁で2.5cmを計る。

年代決定－第2号住居床面から出された若干量の縄文前期初頭の遺物があることからほぼ同期の年代に位置するものとみられる。

3 土壌〔第43図、第44図〕

前期の土壌としては第3号土壌、第4号土壌の2基がある。初めの第3号土壌は第2号住居跡を切って構築してあり、後の第7号土壌は第3号住居跡のすぐ東直上部に位置するもので両者とも内部より検出された土器片より推測して、縄文前期末に属するものと考えたい。



第44図 八幡原No.26遺跡第1号、第2号住居跡実測図

ピット(第44図)

ピットとしては、第3号住居跡周辺から確認されたものがほとんどで、P 8, P 13 ~ P 15, P 20がある。P 20は最も大きく、直径80cmの円形状で、深さ50cm, P 15は径70×80cm, 深さ40cm, その他P 8, P 13~16は20cm~40cmで、深さも15~30cmであった。内部からは何も検出されなかった。住居付近に点在することから同住居跡と関係の深い施設の一部とみられる。

4 第1号住居跡(第42図, 第44図, 第45図, 第77図版~第80図版)

第2号住居跡第3号土壤を切って構築しているもので、以前に筆者が試掘をし確認をした遺構である。その時には住居跡の一部と考えられた土器埋設石組複式炉1基と、住居跡の壁とみられる一部を調査しただけにとどまったものである。

平面図形状—ほぼ円形プランを有する南北4.5m東西4mの堅穴住居跡である。第4層黄褐色微砂質粘土層を掘り凹めて構築している。

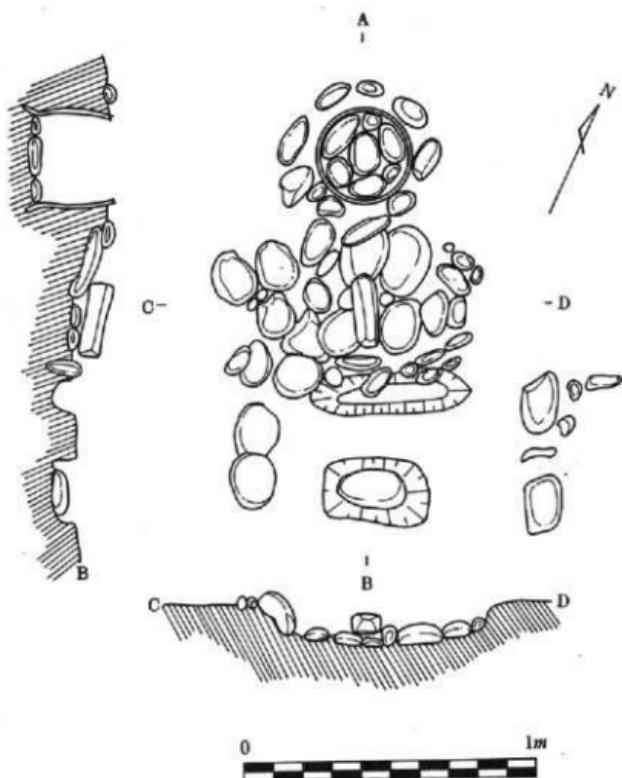
周溝—第1号土壤~第3号土壤を切っているので一部不明瞭な部分もあるが、ほぼ一周するものと考える。溝の深さは北壁部で床面より6cm, 南壁部付近で10.2cm, 南壁部で10cm位、東壁部で10cmと北側が浅く、南側が深く、巾としては最短で20cm、最大径を有する西壁付近で31cmを計る。

床—は平坦で固くしまっている。北側が南側に比べて、5~7cm若干高い傾斜を有する。

壁—は壁を含めて北側で30cm, 南側で30cm, 西側で42cm, 東側で27cmを測り、ほぼまっすぐ立ち上る。

ピット—としては住居跡の主体を示すものP 1~P 4, 小ピット群P 10~P 21, 周溝内に存在するP 22~P 27と皿状のピットを加えた23ヶ所の大きく3つのグループに分けられる。

最初のグループは住居跡の大黒柱的要素を呈するピット配列で、P 1は50×53cm, 深さ53cm, P 2は35×40cm, 深さ50cm, P 3は35×32cm, 深さ60cm, P 4は40×30cm, 深さ30cmといずれも30~60cmと深い。次のグループは、P 3と西側壁の中間に点在する12ヶ所の小ピット群で径8cm~12cm, 深さ7cm~13cmを測るものである。ほぼ15cmの間隔で不整の方形状に配列されてあった。最後のグループは溝状内のピット群で、北側壁に集中するP 23~P 27と、西側から南壁部にかけて分布する皿状に分けられる。前者のものは径が25~8cmで、深さも15~8cm位、皿状は径が25cm~15cm



第45図 八幡原No.26遺跡第1号住居跡複式炉実測図

で、深さが5～10cmと浅い。なお西から北壁にかけては砂質性分を多量に含むシルト層から考えると、元々北側とはほぼ同様なピット配列があったのに対し、住居廃絶後に崩れて皿状に変化したものとみられる。

以上のことから判断すると、P1～P4は住居跡の中心的要素を有するピット、P10～P22は、タナ状の施設を構築したピット列で、最後の溝状のピット群は規則的な配列から考慮して中心柱（P1～P4）を支える梁的な施設の跡とみたい。

炉（第45図参照）としては、昭和45年5月の試掘調査で埋設土器を取り上げた際

に、一部埋設土器付近の石組を取り外したので、不明確な部分もあるが、今回の調査ではその時に省いた石組と埋設土器を組入れて復元している。従って図面、写真、図版等はすべて炉に関しては復元したものを用いた。その点を考慮し、炉の形態を述べれば、長軸 1.5m 短軸 1m で主軸が南北を示し、炉跡の北側には土器埋設部で器内外部に円窪を置く。中央の敷石部は舟形状に円窪を有する。また下方部は敷石部からのがる袖石部、そして内部に二つの落ち込みが認められた。なおこの複式炉は同じ仲間でも最も発達したタイプの土器埋設石組複式炉に分類できる。

5 第4号住居跡(第42図)

第3号住居の西方 4m より確認された。直径 4m の円形プランを呈するもので、北と東側に周溝と思われる溝が検出され、南西には $1\text{m} \times 80\text{cm}$ の第8号土壙も検出されている。柱穴は5本で、その他小さいビットが7ヶ所ある。周溝は東側で巾 60cm 、深さ上部より 45cm 、北側で 30cm 、深さ 25cm を計った。床は平坦で柔かい感じである。遺物は発見されなかった。

6 第5号住居跡(第42図)

第1号土壙の北側 1m に位置するもので、一部西側に壁と思われる落ち込みと、いくつかのビット埋甃、土壙等が存在することから住居跡とした。だが柱穴の状況、炉跡が存在しない点から考えると、十分な検討を要する必要がある。一部確認された周溝の深さは 12cm 、ビットは $10 \sim 25\text{cm}$ 、深さ $10 \sim 15\text{cm}$ で不規則に存在する。第7号土壙は、 $1.5 \times 1.3\text{m}$ の梢円形状で深さ 55cm を計る。遺物は縄文中期後葉の土器片20片と、石器6点が得られた。

7 土壙(第42図、第45図)

中期の土壙は、第1号住居跡に一部切られて存在する。第1号土壙をはじめ第1号住居跡の南側の第2号土壙西側に位置する第5、6号土壙、北側に位置する第7号土壙それに第4号住居跡の西壁に位置する第8号土壙などの6基が検出された。いずれも第1号住居跡をとり巻くように位置し興味ある分布状況を呈する。

第14表 八幡原No.26遺跡第1号土壙内遺構分類表

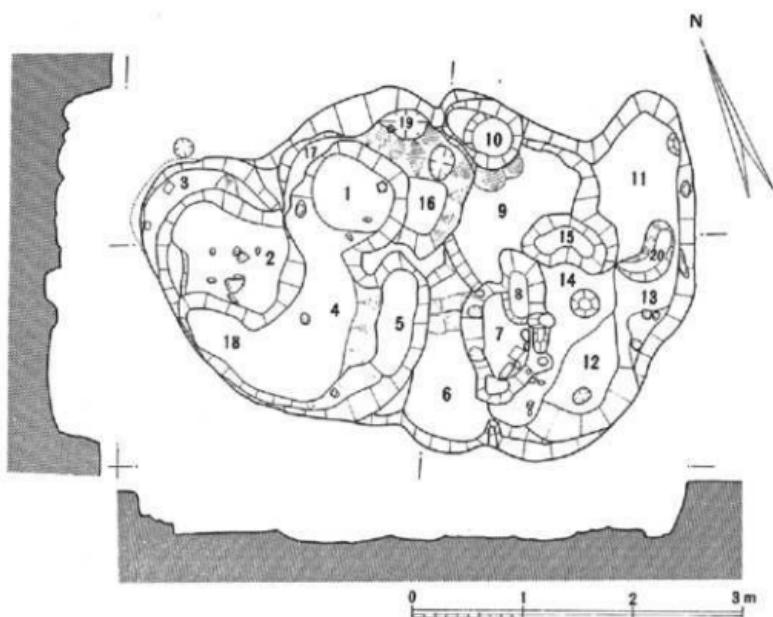
遺構No.	遺構種別	推定形状	推定期	時期	備考	底部
1	土 壙	円 形	100 × 100	大木 10 b	2.4.17号を切る	平坦

遺構No	遺構種別	推定形状	推 定 形	時 期	備 考	底部
2	土 壤 槽 円 形	130 × 100	大 木 10	1, 4, 18 号に切られ、2号を切る	平坦	
3	土 壤 円 形	130 × 130	大 木 9 b	2号に切られる	平坦	
4	土 壤 槽 円 形	150 × 100	大木10 a?	1号に切られ、2, 5号を切る	平坦	
5	土 壤 槽 円 形	100 × 50	不 明	4号に切られ、6号を切る	不整	
6	土 壤 円 形	110 × 30	不 明	5, 7号に切られる	不整	
7	土 壤 槽 円 形	100 × 70	大 木 9 b	8号に切られ、6, 9, 14号を切る	不整	
8	ピット 槽 円 形	70 × 45	不 明	7, 9, 14号を切っている	不整	
9	土 壤 円 形	160 × 150	大 木 9 b	11号を切り、8, 10, 15, 16号に 切られる	平坦	
10	土 壤 槽 円 形	75 × 55	大 木 10 a	9号を切る	不整	
11	土 壤 槽 円 形	150 × 110	不 明	11, 20号に切られる	平坦	
12	土 壤 円 形	130 × 120	大 木 9 b	14号に切られ、13号を切る	平坦	
13	土 壤 円 形	100 × 100	不 明	12, 13, 20号に切られる	不整	
14	土 壤 円 形	100 × 100	不 明	12, 13号を切り、7, 8, 12, 13 号に切られる	平坦	
15	ピット 不整槽円形	70 × 45	不 明	9, 11, 14号を切る	不整	
16	土 壤 円 形	100 × 100	不 明	1号に切られ、9号を切る	平坦	
17	土 壤 円 形	90 × 100	不 明	1号に切られる	平坦	
18	土 壤 槽 円 形	150 × 60	不 明	4号に切られ、2号を切る	平坦	
19	ピット 不整槽円形	70 × 50	不 明	11, 13号を切る	不整	
20	ピット 不整槽円形	60 × 25	不 明	11, 13号を切る	不整	

第1号土壤〔第42図、第46図、第80図版〕

平面形状が不整の椭円形状を呈する土壤で、長径4.5m、短径2.8mを計る。土壤内部の埋土のほとんどはカクランを受けて明確な層序は不明である。

土壤内にはいくつもの土壤が切り合い関係を示すと思われる段を有し、凹凸している。それを切り合い関係と傾斜変換線より分けると次の17の土壤と3つのピットに分けられることが判明した。詳しいことは第14表「八幡原No.26遺跡第1号土壤内遺構分類表」を参照願いたい。



第46図 八幡原No.26遺跡第1号土壤実測図

8 昭和45年に調査した結果と今回調査し判明した誤りについて

『置賜考古』(第3号)^④『八幡原埋蔵文化財調査報告書』^⑤の中で述べた遺構の中から
2遺物の出土状況に誤りがあったので修正したい。

上記の二書の中で筆者は、「出土土器について」として4つのグループに大別して述べ、第1のグループとしては竪穴住居の構築によって破壊されたピット内の堆積した土器、第2のグループは竪穴住居跡内ピット出土土器、第3のグループは住居跡の堆積土出土土器、第4のグループは複式炉内埋設土器の4グループにより遺構の年代決定を土器の細別に従って述べたが、今回の調査からすると、第1のグループとしたものは、第1号住居跡からの検出で、第2のグループ、第3のグループはいずれも今回で確認した第1号土壤の堆積出土土器であることが判った。試掘調査という小範囲での調査と筆者の浅学の為迷惑をおかけしたことを本書をお借りし深くお詫び申し上げ、ここに修正の項をもうけることとする。

9 出土土器について

No.26 遺跡第1号住居跡、第1号土壙内から出土された土器を、出土状況を考慮して分類すると次の3グループに分けられる。

第1のグループは住居内堆積土出土の土器で、住居跡が廃絶した（機能を失った）後にしてられた土器群である。第2のグループは住居跡によって切られた（あるいは切った）1号土壙堆積土出土の土器群である。第3のグループは、住居跡が機能していた時期に属すると考えられる炉内の埋設土器である。これらの土器はいずれも縄文時代中期後葉のものと考えられるが、ここでは器形、文様表出技法、単位文様構成等の諸点からさらに検討を加え、また出土状態等を参考にして詳しく年代を考えてみたい。

1) 土器の分類

第1号住居跡ならびに第1号土壙の出土土器を器形からみると、口縁が外反する深鉢形（器形A）、口縁が内反する深鉢形（器形B）、壺形土器（器形C）、浅鉢形土器（器形D）、注口土器（器形E）、台付土器（器形F）、キャリバー形土器（器形G）などがある。この中で器形AとBには単節ならびに無節斜縄文のみが施された飾られぬ土器（粗製土器）も含まれる。文様表出技法としては、地文となる縄文はL字縄文原体を回転させたものが多く、これに沈線および凹線、隆起線、ヘラ状工具によるミガキなどが加わる。単位文様は、懸垂文、円文、縦長の「C」字状文、さらには横位の「S」字状文などがある。前者の文様は縦方向に、後者は横方向に展開する場合が多い。ここでは単位文様と文様構成を中心として出土土器を分類してみたい。

○第1類土器〔第48図15・16、第49図2~4、第52図4・5〕

円文ないし懸垂文を単位文様として、文様が縦方向に展開する。器形には、口縁が外反する深鉢形（器形B）キャリバー形（器形G）がある。

○第2類土器〔第48図1~14、第52図1〕

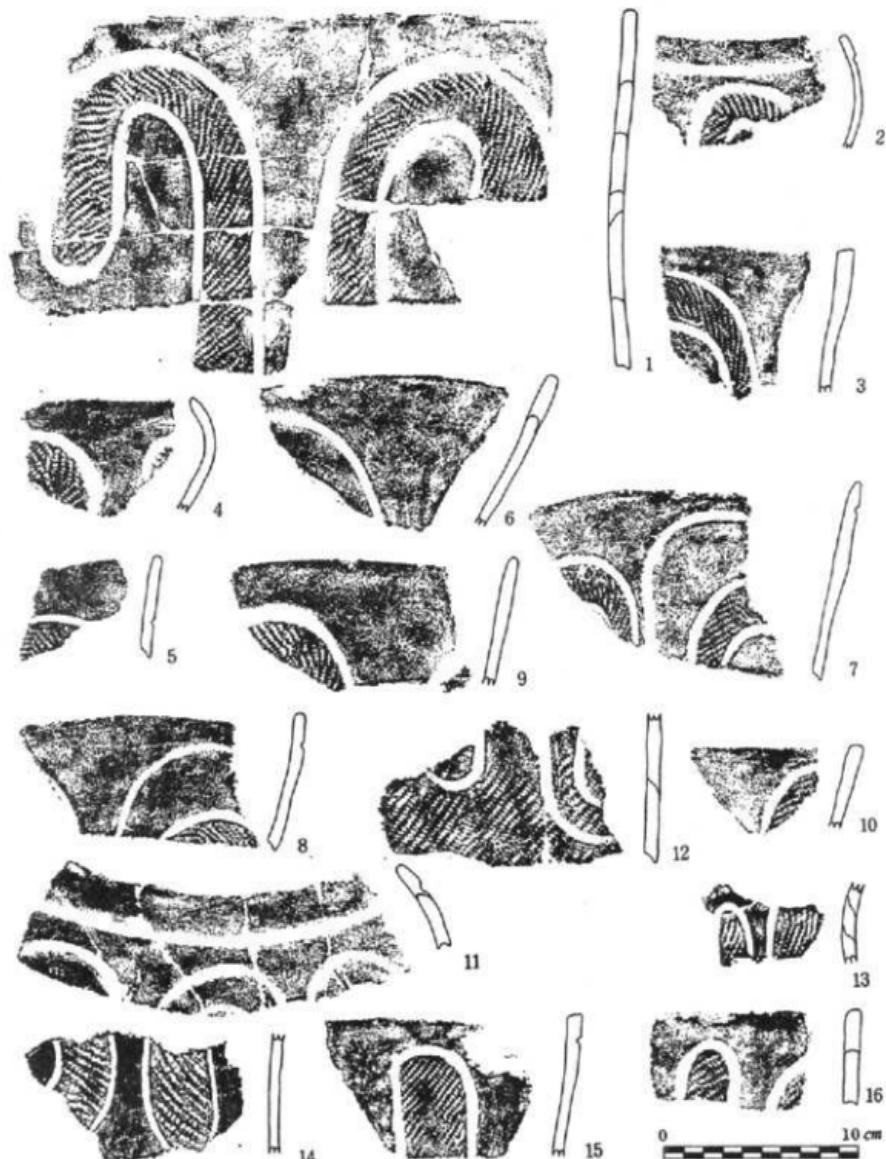
縦長の「C」字状ないし逆「C」字状を単位文様とし、文様が縦方向に展開する。器形には、口縁が外反する深鉢形（器形A）、口縁が内反する深鉢形（器形B）、壺形土器（器形C）などがある。

○第3類土器〔第47図1~13、第49図1、第51図1~3、第52図7・8〕

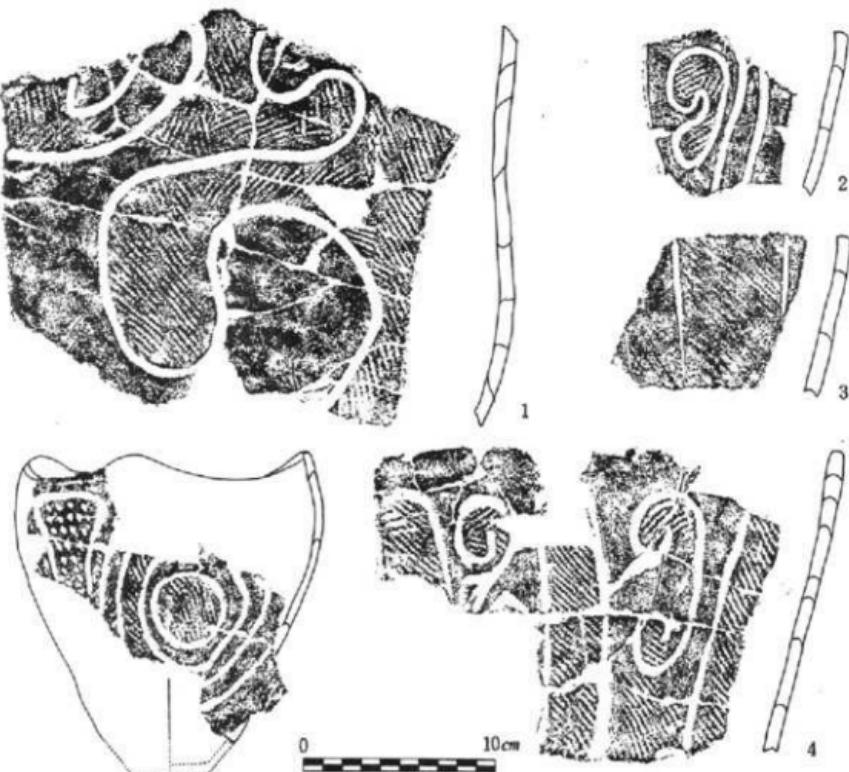
横長の「C」字、逆「C」字、横長の「S」字、逆「S」字状文等を単位文様として、文様が横方向に展開する。器形としては、口縁が外反する深鉢形（器形A）が多いが、口縁部が内反する深鉢形（器形B）や注口土器（器形E）、台付土器（器形F）もある。



第47図 八幡原No.26 遺跡第1号住居跡内出土の土器(1)



第48図 八幡原No.26遺跡1号土壙内出土の土器(2)



第49図 八幡原No.26遺跡第1号住居跡堆積土内出土の土器

○第4類土器〔第50図、第52図3・6〕

単簡、無節捲文が施されるだけで、特に文様は認められない。器形として口縁部の外反する深鉢形（器形A）と口縁の内反する深鉢形（器形B）がある。

○第5類土器〔第52図2〕

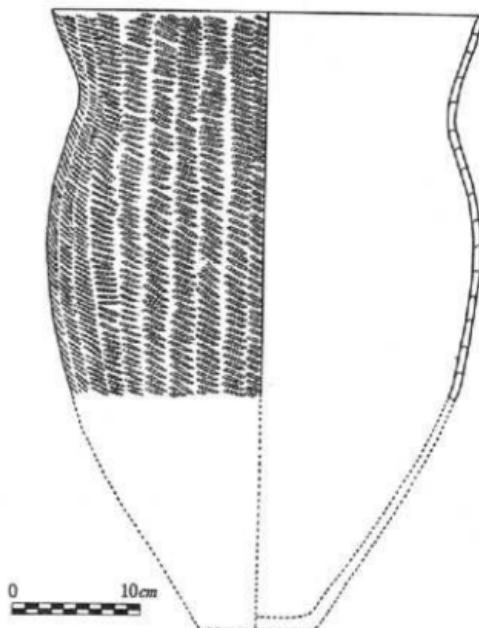
ヘラミガキなどによる無文の粗製土器で、器形としてキャリバー形（器形G）がある。

2) 各土器類型の年代について

以上のように分類された諸土器類型でどのような年代的位置が与えられるべきかについて述べると、竪穴住居跡からは第1類が出土しているが、第1号土壙内の土器は、第2類、第3類の土器群が主である。このことから第2、3類の土器は、第1類土器より

新しい時期のものであることがいえる。これ以上の土器の時期決定は他の遺跡の資料との比較にまたなければならない。ここでは東北南部における縄文時代の土器群についてまとめた丹羽茂氏の成果(丹羽1971)によれば、第1類土器は、大木9b式、第3類土器は大木10古式期の土器とすることができる。

また第2類土器は、大木9b式期でも比較的新しい要素を有

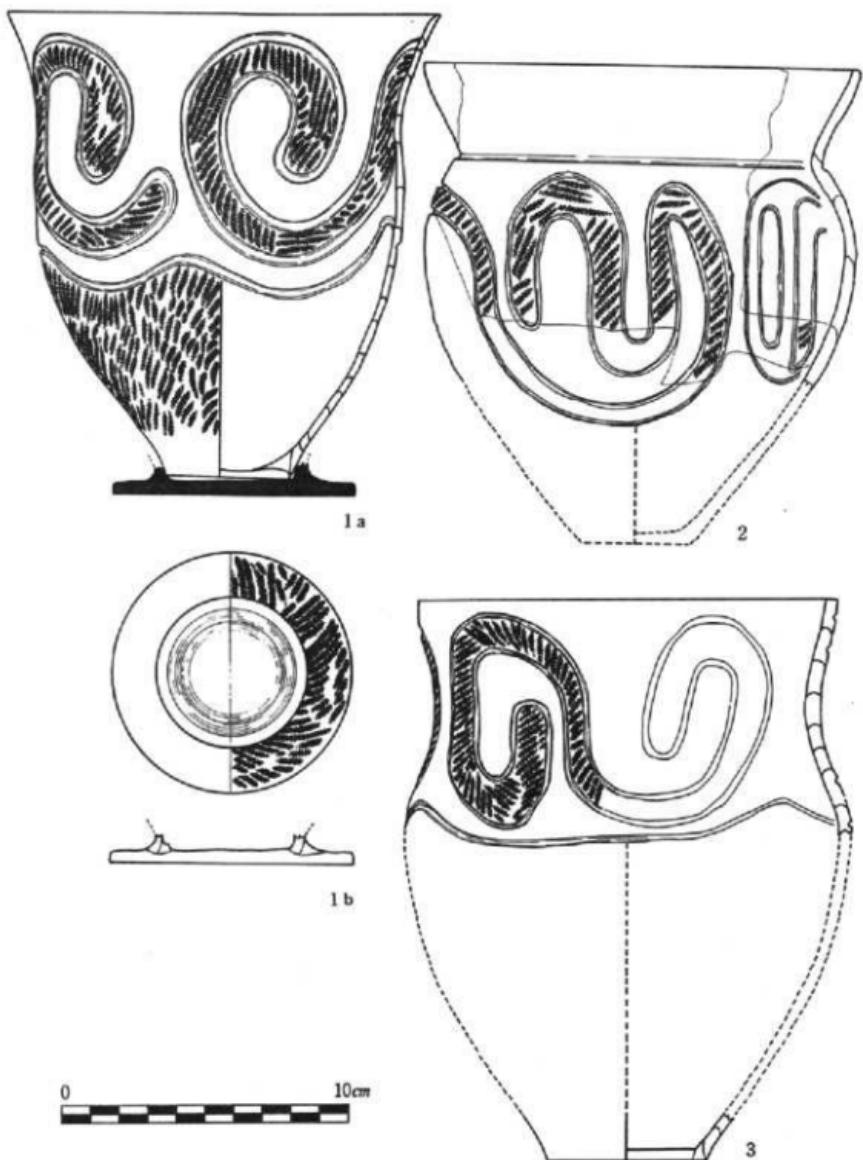
第50図 八幡原N_o 26 遺跡炉跡埋設土器

するもので大木10古式期の土器との間を埋めるものと考えられる。大木10古式期の土器は文様構成上からさらに大木10a式、大木10b式期のものに細分できるが、本遺跡の資料は破片が多くためにその点の吟味は難しい。ただ第1号土壇、分類1号土壇、同10号土壇内の4個の完形土器〔第51図1(a, b)ならびに第51図3〕は、第3類土器でも大木10b式期の特徴をもつ。第4類土器、第5類土器の明確な年代決定は困難である。とくに第4類土器は、炉の埋設土器であり、住居跡の年代決定に重要な意味をもつがこれは次に考察する。

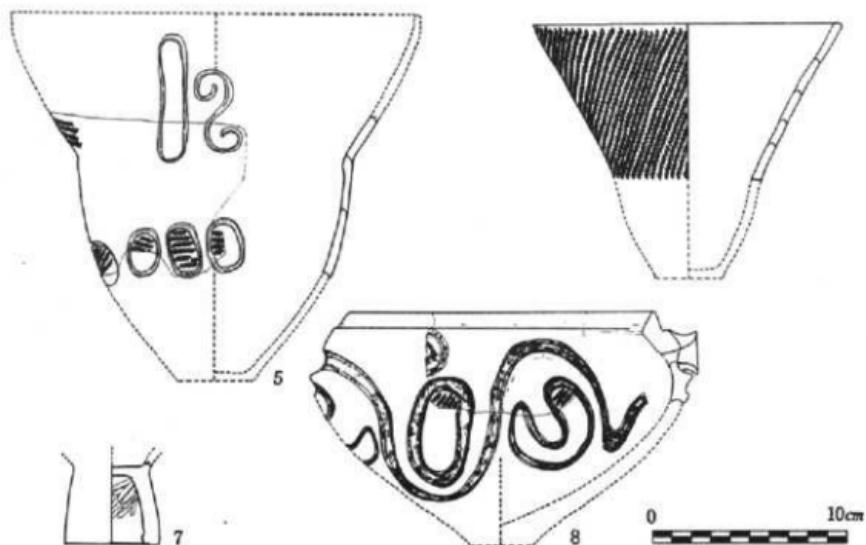
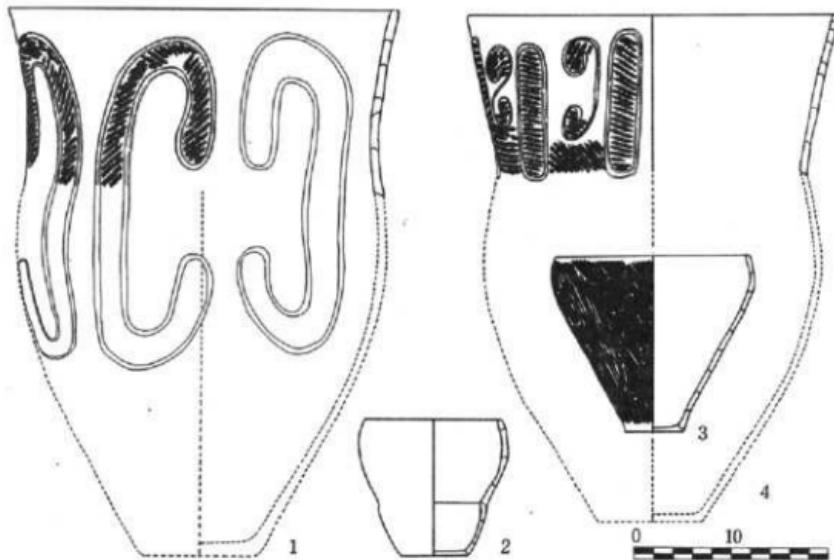
3) 遺構の年代について

ここでは年代的位置を与えられた土器がどのような出土状態を示しているかを検討することによって年代を推定したい。前節で本遺跡出土の土器、その出土状態から3つのグループに分かれることを指摘しておいた。

第1のグループはすでに述べたように、第1号住居跡内の堆積土より出土したものである。従って本遺構は大木9b～大木10古式期に至る段階で廃絶され、その後に比較的



第51図 八幡原№26遺跡第1号土壙跡内出土の土器実測図(1)



第52図 八幡原No.26遺跡第1号土壙出土の土器実測図(2)

竪穴住居跡の年代を推定することが可能な資料は炉跡内埋設土器1点であり、埋設土器は粗製土器であるため詳しい年代決定は難しい。このことは次の土壤の年代とも関連を有するのでそこで述べる。第2のグループは、第1号土壤内の堆積出土の土器であり、この中には第2類、第3類土器がほぼ等しく含まれていることから、大木9b式でも比較的新しい時期から大木10bにかけて存在した（使用した）ものとみられる。

また、第1号土壤と称したものは、前節で述べた第14表によると、土壤17基、ピット3基の計20基の遺構群が集中して存在した可能性を指摘した。また、第1号住居跡にこれらの土壤群の位置が非常に接近して存在することなどからも考慮すれば、第1号住居跡と第1号土壤、同2号、5～7号土壤らは密接な関係を呈するものと考えたい。従って第1号住居跡は、大木9b式のある時点では構築され、大木9b～10古式にかけて機能していたとみられる。

10 埋甕遺構〔第42図、第53図、第96図版〕

埋甕遺構としては、I～V区拡張部に3基、H・I・3区1基の合計4基が確認された。

埋甕は前のNo.25遺跡とは対象的に深鉢形土器を直立させて埋納させており、第1号埋甕、第3号埋甕〔第53図〕は粗製（飾られぬ）土器、第2号埋甕、第4号埋甕は整製土器であった。掘り方はいずれも確認できなかった。年代決定が可能である第2号、第4号埋甕は文様構成からして、第2号は大木10古(a)、第4号は大木9bにそれぞれ位置づけられる。

4 出土遺物

No.26遺跡から出土した縄文期の遺物は、土器、石器含めて整理箱にして約20箱分に相当する。主に遺構ならびに包含層内から出土のものがほとんどで、土器はI～V区、石器はG～Q～7～11区、C～H～13～17区、拡張部内からの検出が多い。以下簡単に土器と石器に大別して述べよう。

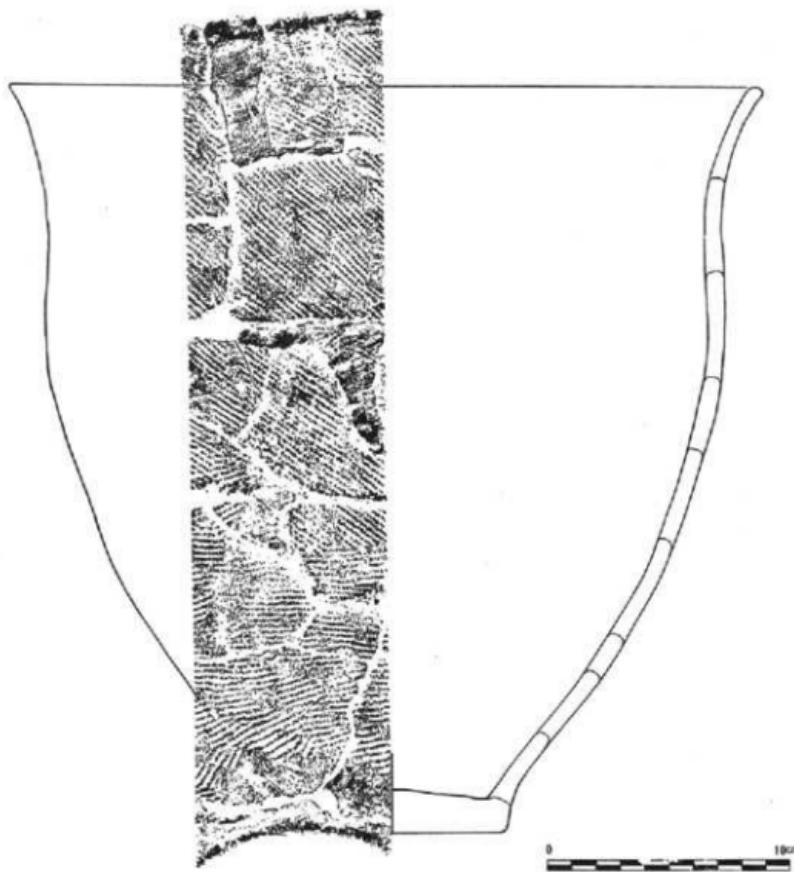
I 土 器〔第53図～第55図、第101図版1・2、第102図版1・2〕

土器は整理箱にして約15個で、その中には埋甕4個を含む完形後元土器10個体がある。土器は文様構成により次のように分けられる。

A群土器〔第54図1〕

貝殻文を沈線の組合せで構成しているものと考えられる。縄文早期大寺式に併行する

ものとみられる。



第53図 八幡原No.26遺跡第3号埋壙拓影図

B群土器〔第54図2～15〕

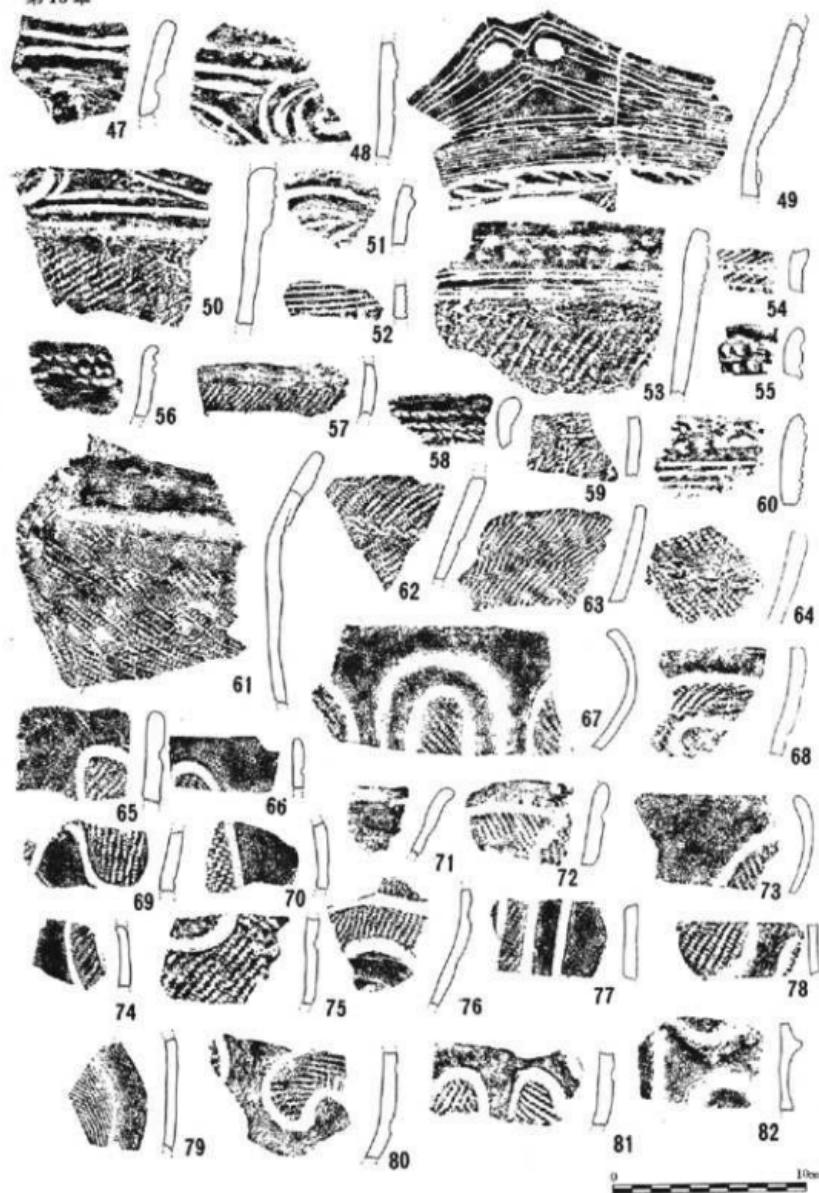
藤状撚糸圧痕文、羽状繩文、結節羽状繩文、ループ文、爪形文、撚糸文で構成されているもの。繩文前期初頭ー上川名上層ならびに花積下層式に併行するものとみられる。

C群土器〔第54図16～45、第55図47～64〕

爪形文による平行、山形文、沈線によるキザミ平行渦巻文それに粘土紐による貼り付



第54図 八幡原No.26遺跡出土土器拓影図(1)



第55図 八幡原No.26遺跡出土土器拓影図(2)

第15表 八幡原No.26 遺跡出土土器拓本分類表

挿図番号	遺物番号	出土区域	層位	出土年・月・日	備考
	1	H-21区	第3層	S 51. 10. 29	
	2	第Ⅲ区	第7層	S 51. 9. 20	
	3	C~F-15・16区	第3層	S 51. 10. 16	
	4	第Ⅲ区	第7層	S 51. 9. 20	試掘溝
	5	第Ⅲ区	第2層	S 51. 7. 7	
	6	第Ⅲ区	第2層	S 51. 7. 7	
	7	第Ⅲ区	第3層	S 51. 7. 7	
	8	H-15区	第3層	S 51. 9. 1	
	9	H-15区	第3層	S 51. 9. 1	
	10	第1号住居内		S 51. 6. 8	
	11	F~H-13・14区	第3層	S 51. 10. 23	
	12	F~H区	第3層	S 51. 10. 7	
	13	C~E-15・16区	第3層	S 51. 10. 16	
	14	C~E-15・16区	第3層	S 51. 10. 16	
	15	C~E-15・16区	第3層	S 51. 10. 16	
	16	第Ⅲ区	第3層	S 51. 10. 28	
	17	第Ⅲ区	第3層	S 51. 10. 25	
	18	第Ⅲ区	第3層	S 51. 10. 28	
	19	第Ⅲ区	第7層	S 51. 9. 10	試掘溝
	20	第Ⅲ区	第3層	S 51. 9. 20	
	21	第IV区	第4層	S 51. 9. 20	
	22	第IV区	第4層	S 51. 9. 20	
	23	第IV区	第4層	S 51. 9. 20	
	24	C-5区	第2層	S 51. 9. 16	
	25	表探		S 51. 9. 27	
	26	G~K~F~H区	第3層	S 51. 10. 17	
	27	第I区	第1層	S 51. 5. 26	
	28	C~E-15・16区	第3層	S 51. 10. 16	

	29	第Ⅲ区	第6~8層	S 51. 9. 21	試掘
	30	第Ⅲ区	第8層	S 51. 9. 21	試掘
	31	第Ⅲ区	第6~8層	S 51. 9. 21	試掘
	32	第Ⅲ区	第6~8層	S 51. 9. 21	試掘
	33	第Ⅲ区	第6~8層	S 51. 9. 21	試掘
	34	F~H-13·14区	第3層	S 51. 10. 7	
	35	F~H-14区	第3層	S 51. 10. 7	
	36	G~E-15·17区	第3層	S 51. 9. 27	
	37	F~H-13区	第2層	S 51. 10. 4	
	38	G~H-18区	第3層	S 51. 10. 16	
	39	F~H-13区	第2層	S 51. 10. 4	
	40	C~E-13·14区	第3層	S 51. 10. 7	
	41	C~E-13·14区	第3層	S 51. 10. 1	
	42	C~E-13·14区	第3層	S 51. 10. 1	
	43	C~E-15·16区	第3層	S 51. 10. 16	
	44	C~E-15·16区	第3層	S 51. 10. 16	
	45	C~H-15·16区	第3層	S 51. 10. 16	
	46	第Ⅲ区	第7層	S 51. 9. 20	試掘溝
	47	G-16区	第3層	S 51. 6. 27	
	48	G-16区	第3層	S 51. 10. 27	
	49	F~H-13·14区	第3層	S 51. 10. 29	
	50	G-16区	第3層	S 51. 10. 27	
	51	G-16区	第3層	S 51. 10. 29	
	52	F~H-14·15区	第3層	S 51. 10. 7	
	53	F~H-13·14区	第3層	S 51. 10. 29	
	54	E~G-15·17区	第3層	S 51. 10. 6	
	55	第Ⅲ区	第8層	S 51. 9. 29	試掘溝
	56	第Ⅲ区	第8層	S 51. 9. 29	試掘溝
	57	C-13区	第1層	S 51. 8. 31	表土
	58	第Ⅲ区	第8層	S 51. 9. 29	試掘溝
	59	C~E-16·17区	第3層	S 51. 9. 27	

	60	F~H-13・14区	第3層	S 51. 10. 29	
	61	第I号住居内埋土		S 51. 5. 29	
	62	C-13区	第3層	S 51. 8. 31	
	63	C-13区	第3層	S 51. 8. 31	
	64	H-I-21・22区	第2層	S 51. 10. 19	
	65	第III区	第2層	S 51. 7. 7	
	66	第III区	第4層	S 51. 7. 8	
	67	第III区	第2層	S 51. 9. 21	壁面
	68	第I区	第1層	S 51. 5. 26	
	69	第I区	第1層	S 51. 5. 28	
	70	第III区	第3層	S 51. 7. 4	
	71	H-15区	第2層	S 51. 9. 6	
	72	第III区	第4層	S 51. 9. 13	
	73	第II区	第2層	S 51. 9. 21	壁面
	74	第I号住居跡内		S 51. 8. 21	
	75	第III区	第2層	S 51. 7. 3	
	76	H-12区	第2層	S 51. 9. 4	
	77	第III区	第1号土 埋出内	S 51. 9. 21	
	78	第III区	第2層	S 51. 9. 21	壁面
	79	第II区	第2層	S 51. 7. 8	
	80	第II区	第4層	S 51. 9. 13	
	81	第III区	第2層	S 51. 7. 3	
	82	L-22区	第2層	S 51. 9. 23	

文、縄文などで構成するもの。縄文前期末の大木6式に併行するものとみられる。

D群土器〔第53図、第55図、第101図版1・2 第102図版1・2〕

磨消縄文を基本として、沈線で区画した縦位の円文、懸垂文、C字状文、それに横位のC字状文、S字状文らによって構成するもの。縄文中期後葉の大木9b～10式に併行するものとみられる。

以上の各出土地区層位の詳細は第15表「八幡原No.26遺跡出土土器拓本分類表」を参考照覧したい。

第16表 八幡原No.26遺跡出土石器分類表

石 鐵 21 点

遺物番号	出 土 区 域	層 位	出 土 年 月 日	備 考
5	F-16区	第2層	S 51. 9. 18	図-3
17	V-H 15-17区	第2層	S 51. 10. 29	
18	H- 3区	第2層	S 51. 10. 23	
20	G-13区	第2層	S 51. 9. 8	
1	第Ⅲ区	第3層	S 51. 7. 5	
2	第Ⅲ区	第3層	S 51. 9. 18	
3	L- 10区	第3層	S 51. 10. 26	
4	K- 8区	第3層	S 51. 10. 17	
7	G- 13区	第3層	S 51. 10. 4	図-6
8	G- 13区	第3層	S 51. 10. 4	図-1
9	F- 14区	第3層	S 51. 10. 7	
10	H- 22区	第3層	S 51. 10. 21	図-5
12	H- 22区	第3層	S 51. 10. 6	
13	第 3区	第3層	S 51. 7. 7	
14	第 Ⅳ区	第3層	S 51. 9. 20	図-7
15	第 Ⅴ区	第3層	S 51. 9. 13	
16	A- B区	第3層	S 51. 9. 18	図-4
21	D-15区	第3層	S 51. 10. 12	
11	H-14区	第4層	S 51. 10. 23	
19	Ⅱ -区	第4層	S 51. 9. 13	
6	第 Ⅲ区	第3層	S 51. 9. 25	図-2

石 捣 2点

遺物番号	出土区域	層位	出土年月日	備考
1	K-8区	第2層	S51. 8. 5	図-20
2	C-14区	第3層	S51. 10. 6	図-27

石 匙 18点

遺物番号	出土区域	層位	出土年月日	備考
1	G H - 9 + 10区	第1層	S51. 7. 28	
3	D - 16区	第1層	S51. 9. 20	
6	L - 9区	第2層	S51. 8. 3	図-18
2	G - 8区	第3層	S51. 10. 21	図-19
5	I - 21区	第3層	S51. 10. 21	
4	G - 8区	第3層	S51. 10. 21	図-12
7	第V区	第3層	S51. 8. 5	図-17
8	H - 14区	第3層	S51. 9. 17	
9	第V区	第3層	S51. 9. 18	図-13
10	第V区	第3層	S51. 9. 11	
12	第IV区	第3層	S51. 9. 17	
13	I - 22区	第3層	S51. 8. 12	図-14
15	I - 9区	第3層	S51. 8. 20	
11	I - 9区	第4層	S51. 8. 21	図-10
14	K - 8区	第4層	S51. 9. 22	図-11
18	K - 10区	第4層	S51. 8. 3	図-15
16	H - 11区	第2層	S51. 8. 5	
17	M - 8区	第2層	S51. 8. 5	
19	H - 11区	第4層	S51. 10. 21	図-16

石 筑 21点

遺物番号	出土区域	層位	出土年月日	備考
1	A - 13区	第2層	S51. 9. 10	

5	10-L区	第2層	S 51. 8. 3	
6	10-L区	第2層	S 51. 8. 3	
13	M-9区	第2層	S 51. 8. 11	
16	M-8区	第2層	S 51. 8. 5	
17	M-8区	第2層	S 51. 8. 5	
19	G-16区	第2層	S 51. 9. 16	
2	K-8区	第3層	S 51. 8. 5	
18	M-9区	第3層	S 51. 10. 19	
4	Q-7区	第3層	S 51. 8. 12	图-23
7	H-17区	第3層	S 51. 10. 7	
9	T-7区	第3層	S 51. 8. 11	
10	Q-7区	第3層	S 51. 8. 12	
11	M-9区	第3層	S 51. 8. 12	
15	FGH-14-15区	第3層	S 51. 10. 6	图-24
21	H-17区	第3層	S 51. 10. 7	图-21
8	K-8区	第4層	S 51. 10. 22	
14	K-8区	第4層	S 51. 10. 22	
3		表採	S 51. 10. 17	图-26
12	N1·2区		S 51. 8. 11	图-25
20	第Ⅲ区		S 51. 10. 23	图-22

石錐 2点

遺物番号	出土区域	層位	出土年月日	備考
2	GHIJ 10-12区	第4層	S 51. 10. 25	
1	C-13区	第1層	S 51. 8. 31	图-8

磨製石斧 2点

遺物番号	出土区域	層位	出土年月日	備考
2	第1区	1号住居址埋土	S 51. 5. 27	
1	第2号住居	北壁面	S 51. 7. 16	
2	I-24区	第3層	S 51. 10. 26	

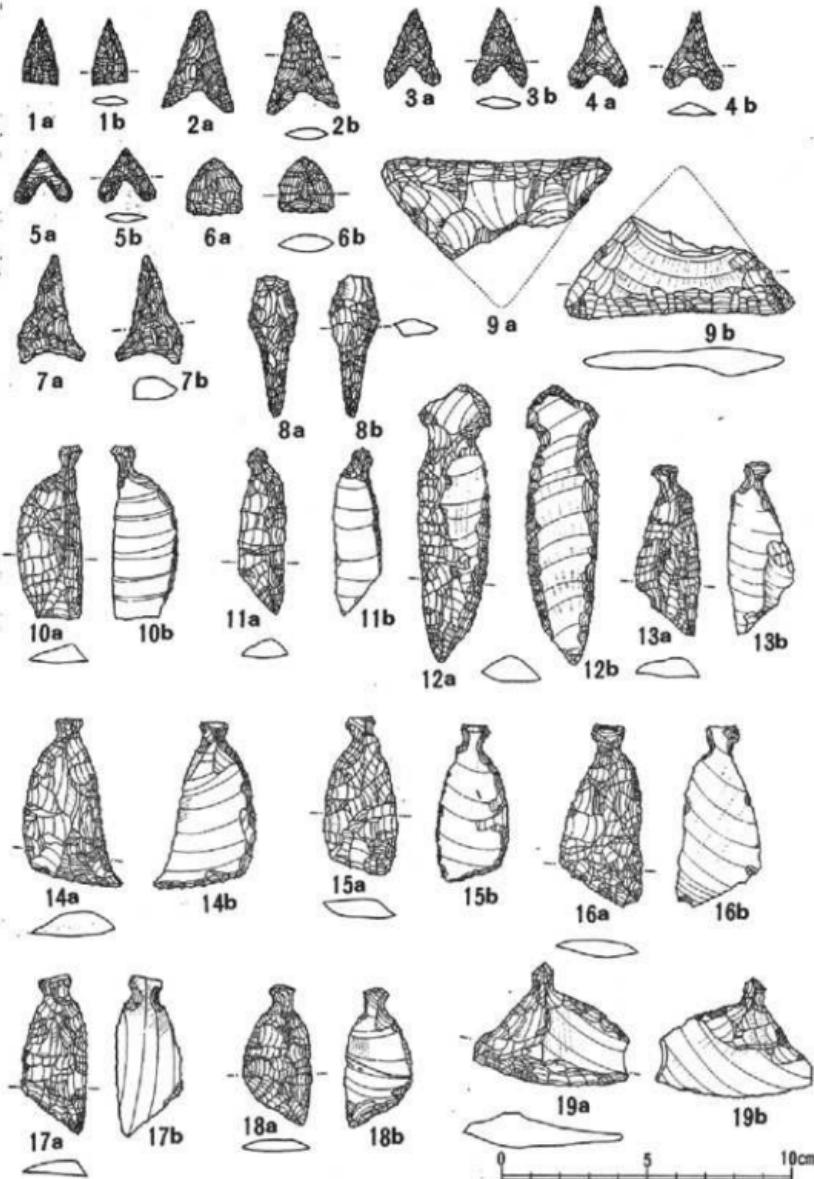
不 定 形 14点

遺物番号	出土区域	層位	出土年月日	備考
10	H-10区	第2層	出土日無	図-24
1	T-10区	第3層	S 51. 8. 5	
2	N-1区	第3層	S 51. 9. 13	
3	G-8区	第3層	S 51. 8. 5	
4	N-1区	第3層	S 51. 9. 13	
5	P-9-10区	第3層	S 51. 10. 19	
6	M区	第3層	S 51. 8. 12	
9	N区	第3層	S 51. 9. 20	図-25
12	P-18区	第3層	S 51. 8. 12	
13	T-10区	第3層	S 51. 8. 5	
7	T-7区		S 51. 8. 12	
11	D-III-土手		S 51. 10. 27	
8		表採	S 51. 10. 1	
14	第Ⅲ区		S 51. 9. 25	図-9

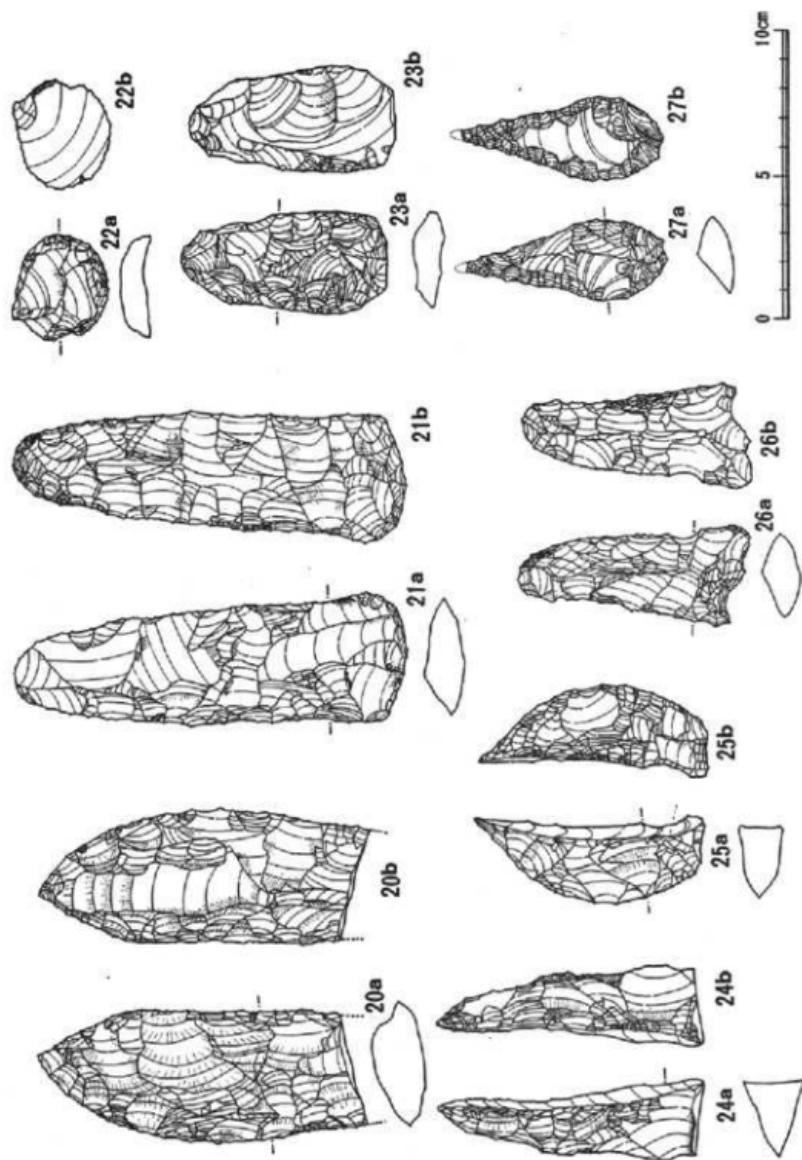
その他の石器 1242点

磨石 40点	圓石 90点
石皿 2点	コア 15点
フレークチップ 1,195点	

石器総数 1462点



第56図 八幡原No.26遺跡出土石器実測図(1)



第 57 図 八幡原 № 26 遺跡出土石器実測図(2)

II 石器〔第56図、第57図、第95図版～第100図版〕

石器は石鎌21点、石槍2点、石匙18点等の計1,462点、整理箱にして5箱がある。

第16表「八幡原No.26遺跡出土石器分類表」を参照願いたい。

石鎌〔第56図1～7、第97図版〕

石鎌は21点検出されており、二等辺三角形状を呈するもの〔第56図1〕、かるく基部が内湾するもの〔第56図5〕、三角形を呈しズンゲリとしているもの〔第56図6〕その他がある。

石匙〔第56図10～19〕

石匙は18点検出されている。形態的には縦形を示し片面が主要剝離を呈するもの、〔第56図10、11、13～18〕、上部にかるくツマミをもつ縦形の石匙で両面加工を有するもの〔第56図12〕、横形を有するもので片面に主要剝離を施すもの〔第56図19〕。

石笠状石器〔第57図、第99図版、第100図版〕

21点検出されている。第57図20・21は、形態的にみて打製石斧にも分けられるが一応ここでは石笠状石器の仲間として考えたい。第57図20は先端部に尖部を有し、第57図21は対象的に丸味を呈している基部は第57図21からみると笠状に平坦である。両者とも両面加工である。22は円形を呈す。一般にエンドスクレーパーとよばれるもので片面加工である。23は、a面に主要剝離を示す石笠状石器、24、25は石笠状石器を切断した形態を示すもので断面が三角状を呈する。両面加工である。26は上端がかかるく曲り丸味を有する両面加工の石器である。27は先端が鋭く尖っている錐状の剝離法を呈する両面加工石器である。

石鎌〔第56図8〕

2点出土している。1点は棒状を呈し、もう1点は上部に丸味を有し、そのまま尖部に向うものである。

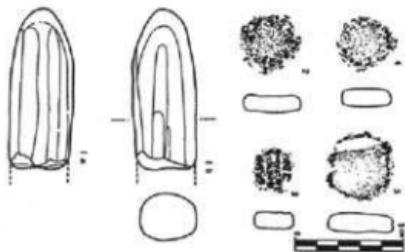
その他の石器〔第56図3〕

先端が損傷したもので正三角形状を有するものとみられる。両面加工である。

III その他の遺物

土製品〔第58図〕

第17表「八幡原No.26遺跡出土土製品分類表」参照。



第58図 八幡原No.26遺跡出土土製品実測図

a 石棒状土製品〔第58図1〕

第6号土壙内から検出されたもので欠損品である。径4.6cm、現高7.3cmを計る。

b 円盤状土製品〔第58図2～5〕

土器破片を加工して作った円形状のもので、図2は径2.5cm、図3は径1.7cm、図4は径2.7cm、図5は径3cmを計る。

第17表 八幡原No.26遺跡出土土製品分類表

遺物No.	出土区域	層位	出土年月日	備考
No.1	第1区	第1号住居内	S51.5.29	58回-4
No.2	第3区	第5層	S51.8.31	58回-3
No.3	第4区	第1号土壙	S51.11.13	58回-1
No.4	第3区	第4層	S51.8.31	58回-5
No.5	第3区	第5層	S51.8.30	58回-2

ここでは前節で述べた各遺構がどのような年代的位置になるのかを簡単に述べたい。

ただし、第1号住居ならびに第1号土壙を含む土壙群についてはすでに説明したので省く。

a 第2号住居跡

床面から検出された土器から判断して縄文前期初頭に位置づけられる。

b 第3号住居跡

住居跡北隅から検出された一括土器は縄文前期末の大木6式併行に属することから、当住居跡の年代も同様に求められる。

c 第4号住居跡

床面から検出された土器より大木9b式に求められる。

d 第5号住居跡

第3号埋甌が良好な資料であるが粗製土器であるため難かしいが、大木9b～10古式と思われる。

6 近代の遺構

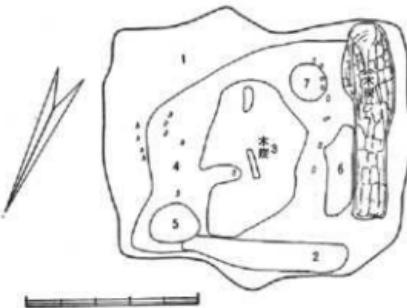
No. 26 遺跡の G ~ Q - 11 ~ 17 拡張部を中心に検出された近代の遺構は、土壙墓と思われる棺を伴ったもの 16 基、火葬骨片を多量に含む焼土跡（以下火葬跡とする）10 基の計 26 基が確認された。ここではこれらの遺構を、I 火葬跡、II 土壙墓の二つに大別して述べたい。

I 火葬跡〔第 42 図、第 59 図、第 60 図、第 89 図版、第 90 図版〕

平面プランが長方形を呈するもので、中央部の両端が外側に張り出す形状を示すのが基本的なプランと思われる。火葬跡の主軸のほとんどは、北東部を向いており、意図的に配置したことがうかがわれる。火葬跡としては、第 2 号、第 3 号、第 4 号火葬跡が明瞭に残っていたのでこれらを中心説明したい。各火葬跡出土の遺物としては、第 20 表に詳しく述べてあるので参考願いたい。

第 2 号火葬跡〔第 59 図、第 90 図版〕

第 7 号墓壙のすぐ南西部に確認された。長径 90 cm、短径 70 cm で、不整の方形状を示す。中央の両端とも 10 cm 位外に張り出すのが特徴で、南上部には長さ 55 cm の木炭があり、内部には多量の木炭、焼土、骨片が確認された。遺物は検出されなかった。



第 59 図 八幡原 No. 26 遺跡第 2 号火葬跡実測図

土色は、木炭、焼土、骨片の分布より次の 7ヶ所に分けられた。

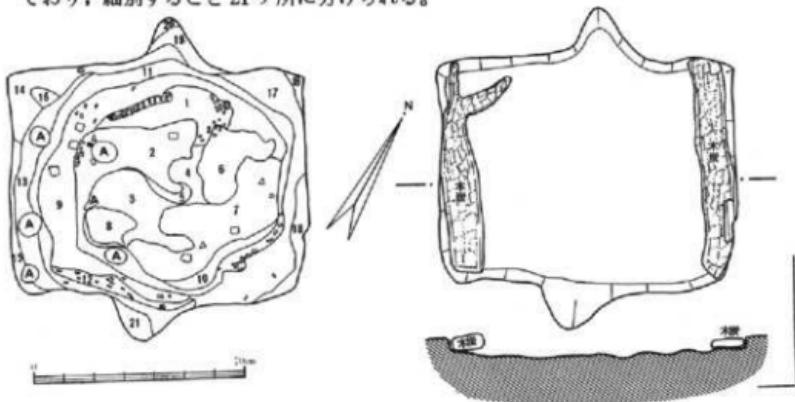
第 18 表 八幡原 No. 26 遺跡第 2 号火葬跡土色変化分類表

No.	土 色	備 考
1	黒茶褐色土	1 部木炭と焼土・骨片を含む
2	"	木炭や多量・焼土・骨片を含む
3	"	焼土と比較的大きな木炭を含む
4	赤茶褐色土	木炭を多く含み、骨片を含む
5	黒褐色土	木炭を多量に含み、骨片を少量含む
6	黒褐色炭化物（木炭層）	骨片と焼土を含む
7	黒褐色土（"）	木炭・焼土と骨片を含む

第3号火葬跡〔第60図、第131図版～第138図版〕

第2号火葬跡の南西直上1.4mに位置する。

第2号火葬跡と同じく、方形プランを呈するもので、長径100cm、短径70cmを計る。中央には左右対称に20cmの張り出しがある。土色変化は中心にそって同心円状に分布しており、細別すること21ヶ所に分けられる。



第60図 八幡原No.26遺跡第3号火葬跡実測図

その中で、1、11、12、9は多量の骨片を含み、1の西には太腿骨が風化してそのまま残っているのも見られた。さらに下部は約5cmの掘り込みを全体に有してあり、西壁部と東壁部に木材を設置してあり、この形態が基本的な形式になっているものとみられる。遺物としては骨片の他に、小ビン破片、鉄針、鉄片などの遺物がある。

以上の火葬跡の所見からまとめてみると、明らかに火葬を目的とした跡であることが分り、次の三点を指摘できよう。

- ① 地面を北方に主軸を向けて5cm～7cm位浅く掘り下げる。一方中央の両端を底面から外内に張り出さようにつくる。
- ② 掘り下げた北側壁と南壁際に木材をおく。
- ③ 掘り下げた面の囲りに5cm～3cm位の棒を10cm位間隔に刺し、その上に多量の燃料材焚き木を重ね、その間に遺体を置き、火葬したものとみられる。

<まとめ>

- ①に示した凹は、アクをためる為のもので、中央の張り出し部分は、通風をよくする為に考慮したものと考えられる。

第19表 八幡原No.26遺跡第3号火葬跡土色変化分類表

No.	土 色	備 考
1	暗茶褐色土	木炭、骨片多量に含む
2	黄赤褐色焼土	少量木炭含む
3	褐色微砂質	"
4	"	
5	"	多量に炭化物を含む
6	茶褐色土	焼土、炭化物を多量に含む
7	黒褐色土	骨片を少量含む、炭化物を多量に含む
8	褐色土	木炭、骨片少量含む
9	黒黄褐色	木炭、焼土、骨片少量含む
10	茶褐色	少量の骨片、炭化物を含む
11	黄褐色焼土	多量の炭化物、焼土を含む
12	暗黒褐色土	" "
13	暗茶褐色	" "
14	褐色黒土	少量の炭化物、焼土を含む
15	"	" "
16	黄赤褐色土	骨片、炭化物少量含む
17	茶褐色土	少量の炭化物、骨片含む
18	褐色土	焼土、炭化物含む
19	黒褐色土	多量の炭化物含む
20	茶褐色焼土	
21	茶褐色土	少量の焼土、炭化物含む

II 墓壙〔第42図、第81図版～第88図版、第103図版～130図版〕

墓壙としては17基確認されており、棺を伴うもの第1号、第2、第3、第4、第7、第8、第10、第13、第16墓壙の10基が確認されている。その中で樽状の棺を呈さないいわゆる箱状を用いているものは、4号、10号、11号、13号、16号の5棺である。また棺を設置するために掘り込んだ掘方方も方形と円形状に分けられるが、樽状、箱状の

第9号火葬跡

遺物No	遺物品名		出土年・月・日	備考
1	骨片	複数片	S 51. 9. 24	多量
2	火鉢形陶器	6点	S 51. 9. 24	破片
3	鉄片	8点	S 51. 9. 24	不明

第10号火葬跡

遺物No	遺物品名	数量	出土年・月・日	備考
1	骨片	複数片	S 51. 10. 19	多量
2	盃	2点	S 51. 10. 19	
3	古銭	1点	S 51. 10. 19	一文銭
4	鉄片	1点	S 51. 10. 19	

掘り方とは必ずしも合わない。遺物としては、土壤によって種々多様であるが、古銭、頭髪、鉄針、簪、数珠などが多くみられた。第21表を参照願いたい。またこれらの棺内から出土された人骨のはとんどは断片的なものが多く、第3号墓壇内からのみほぼ完全な形で出土されている。

なおこのことは、後記の小片保氏他の人骨群所見予報の中で述べるので省略する。

III 人骨群所見予報

1. 第2号墳墓

ここからは人齒群と、多分人骨であろうと思われる骨破片群が発見された。これら人骨片および齒の所見から、壮年期か熟年期のものと考えられ性別その他は不明である。

2. 第3号墳墓

ここからはほぼ一個体分の人骨と、人齒、爪の群や頭髪が多数発見された。遺骸は坐位に納められたものが、腐敗とともに各骨が崩れ落ち、同時に齒、爪および頭髪が落下して棺底に集ったものと考えられる。しかし、改葬の可能性もないでもない。

人骨および齒の所見から、恐らく熟年期の、頑丈な男性骨であろう。また推定身長は約162.6cmと算出された。

(文責 小片 保、松村博雄、関井康雄)

第20表 八幡原No.26遺跡火葬跡出土遺物表

第1号火葬跡

遺物No.	遺物品名	数量	出土年・月・日	備考
1	骨 片	複数片	S 51. 10. 19	多量
2	古 銭	1点	S 51. 10. 19	一文銭
3	鉄 片	11点	S 51. 10. 19	
4	徳久利破片	10点	S 51. 10. 19	

第2号火葬跡

遺物No.	遺物品名	数量	出土年・月・日	備考
1	骨 片	複数片	S 51. 8. 24	多量
2	鉄 片		S 51. 8. 24	

第3号火葬跡

遺物No.	遺物品名	数量	出土年・月・日	備考
1	骨 片	複数片	S 51. 8. 24	多量
2	小ビン破片	複数破片	S 51. 8. 24	4個体分
3	鉄 針	1点	S 51. 8. 24	
4	鉄 片	1点	S 51. 8. 24	不明

第4号火葬跡

遺物No.	遺物品名	数量	出土年・月・日	備考
1	骨 片	複数片	S 51. 9. 24	多量
2	簪	1点	S 51. 10. 10	
3	簪 玉	1点	S 51. 10. 19	青色ガラス玉
4	数珠小玉	1点	S 51. 10. 19	青色ガラス玉
5	ガラス小玉溶解物	19点	S 51. 9. 22	
6	杯	4点	S 51. 10. 19	完形2点 破片2

遺物No	遺 物 品 名	數 量	出土年・月・日	備 考
7	小 ピ ン	3 点	S 51. 10. 19	3個とも溶解
8	ボ タ ン	1 点	S 51. 10. 19	ガラス質解
9	小 盆	1 点	S 51. 10. 19	銅唐草文(お齒黒入)
10	古 錢	1 点	S 51. 9. 19	一文銭
11	鉄 片	10 点	S 51. 9. 16	不 明
12	鉄 針	10 点	S 51. 9. 16	
13	小 豆	9 点	S 51. 9. 17	炭化物

第 5 号 火葬跡

遺物No	遺 物 品 名	數 量	出土年・月・日	備 考
1	骨 片	復数片	S 51. 9. 11	多 量
2	鉄 片	10 点	S 51. 9. 11	不 明

第 6 号 火葬跡

遺物No	遺 物 品 名	數 量	出土年・月・日	備 考
1	骨 片	復数片	S 51. 10. 19	多 量
2	鉄 針	2 点	S 51. 10. 19	

第 7 号 火葬跡

遺物No	遺 物 品 名	數 量	出土年・月・日	備 考
1	骨 片	復数片	S 51. 10. 19	多 量
2	鉄 針	6 点	S 51. 10. 19	不 明

第 8 号 火葬跡

遺物No	遺 物 品 名	數 量	出土年・月・日	備 考
1	骨 片	復数片	S 51. 8. 24	多 量
2	鉄 針	3 点	S 51. 8. 24	

第15章

第21表 八幡原No.26遺跡墓壙内出土遺物分類表

1号墓壙

遺物番号	遺 物 品 名	數 量	出 土 年 月 日	備 考
1	頭 髮	1点	S 51. 7. 30	一体分
2	齒	1点	S 51. 7. 30	奥齒
3	骨 片	9点	S 51. 7. 30	
4	爪	1点	S 51. 7. 30	足親指
5	男 性 用 箕	1点	S 51. 7. 30	
6	古 錢	4点	S 51. 7. 30	一文錢
7	鉄 針	1点	S 51. 7. 30	
8	漆 塗 料 片	断 片	S 51. 7. 30	

2号墓壙

遺物番号	遺 物 品 名	數 量	出 土 年 月 日	備 考
1	齒	10点	S 51. 9. 13	下奥齒
2	骨 片	5点	S 51. 8. 25	不 明
3	飾 金 具	1点	S 51. 9. 11	部 分
4	竹 管	3点	S 51. 9. 13	部 分
5	韁	50点	S 51. 9. 13	
6	キ チ ル	1点	S 51. 8. 25	
7	布 片	15点	S 51. 8. 10	部 分

3号墓壙

遺物番号	遺 物 品 名	數 量	出 土 年 月 日	備 考
2	頭 髮	1点	S 51. 8.	
1	人 骨	一体分	S 51. 8.	

4号墓壙

遺物番号	遺 物 品 名	數 量	出 土 年 月 日	備 考
1	頭 骨	2点	S 51. 8. 18	部 分

	骨 片	1点		部 分
3	齒	18点	S 51. 8. 18	奥歯, 前歯
4	布 片	1点	S 51. 8. 18	
5	鉄 銃	15点	S 51. 8. 18	
6	古 銭	2点	S 51. 8. 3	一文銭
7	竹 片	2点	S 51. 8. 18	不 明
8	皮 製 品	1点	S 51. 8. 4	部 分
9	キ セ ル	1点	S 51. 8. 18	
10	根 付	1点	S 51. 8. 18	木製品

5号墓塚 遺物ナシ

6号墓塚

遺物番号	遺 物 品 名	数 量	出 土 年 月 日	備 考
1	古 銭	5点	S 51. 8. 18	一文銭

7号墓塚

遺物番号	遺 物 品 名	数 量	出 土 年 月 日	備 考
1	骨 片	2点	S 51. 8. 10	
2	木 片	2点	S 51. 8. 2	

8号墓塚

遺物番号	遺 物 品 名	数 量	出 土 年 月 日	備 考
1	頭 髪	1点	S 51. 8. 10	
2	簪	2点	S 51. 8. 10	
3	布 片	3点	S 51. 8. 10	部 分
4	漆 塗 料 片	25点	S 51. 8. 4	断 片
5	布 片	1点	S 51. 8. 4	袖 口
6	杯 (大)	1点	S 51. 8. 10	格子状文入, 青染つけ
7	杯 (小)	1点	S 51. 8. 10	鰐の文様入り
8	杯 (中)	1点	S 51. 8. 10	

9	急 須	1点	S 51. 8. 10	注口付
10	徳久利	1点	S 51. 8. 10	青緑色
11	青硝子瓶		S 51. 8. 10	

9号墓 墓

遺物番号	遺 物 品 名	数 量	出 土 年 月 日	備 考
1	徳久利片	複数破片	S 51. 8. 10	
2	鉄釘	3点	S 51. 8. 10	

10号墓 墓

遺物番号	遺 物 品 名	数 量	出 土 年 月 日	備 考
1	頭 髪	1点	S 51. 8. 2	部分
2	骨	2点	S 51. 8. 4	不明
3	木 片	1点	S 51. 8. 2	不明
4	鉄 釘	12点	S 51. 8. 2	
5	鉄 片	5点	S 51. 8. 4	不明
6	キセル・根付金具	1点	S 51. 8. 4	青銅
7	根 付 玉	1点	S 51. 8. 4	ヒスイ玉
8	皮 製 品	1点	S 51. 8. 4	キセル入

11号墓 墓

遺物番号	遺 物 品 名	数 量	出 土 年 月 日	備 考
1	頭 髪	一体分	S 51. 8. 18	女性
2	簪	2点	S 51. 8. 18	銀の花模様入
3	鉄 片	8点	S 51. 8. 18	不明
4	鉄 釘	62点	S 51. 8. 18	
5	木 片	5点	S 51. 8. 18	不明

12号墓 墓 遺物ナシ

13号墓塚

遺物番号	遺 物 品 名	数 量	出 土 年 月 日	備 考
1	頭 髪		S 51. 8. 4	頭髪部分
2	数 珠	9点	S 51. 8. 4	ガラス小玉
3	簪	1点	S 51. 8. 4	部 分
4	骨	2点	S 51. 8. 8	
5	鐵 釘	16点	S 51. 8. 4	鐵 釘 10本 鐵釘片 6

14号墓塚 遺物ナシ

15号墓塚 遺物ナシ

16号墓塚

遺物番号	遺 物 品 名	数 量	出 土 年 月 日	備 考
1	頭 髪	一部	S 51. 8. 18	部 分
2	刃	1点	S 51. 8. 18	
3	鐵 破 片	5点	S 51. 8. 18	
4	徳久利破片	6点	S 51. 8. 18	複数破片

17号墓跡

遺物番号	遺 物 品 名	数 量	出 土 年 月 日	備 考
1	頭 髪	一部	S 51. 8. 18	部 分

IV 今回確認された近代墓場にかかわる文献について

① 1795 (寛政7)年10・11	領内疱瘡蔓延 患者 8,389人 夭死 2,064人
1855 (安政2)年11	疱瘡流行、死者多数なるを以て、齊癪種痘を獎勵
1858 (安政5)年10・11	赤湯村にてコレラ発生
1862 (文久2)年8	麻疹流行、死亡者多し、齊癪依て予防並びに衛生法を領内に布告
1864 (元治元年)	比年コレラ流行
◎ 1880 (明治12)年	コレラ病発生、米沢に蔓延、死亡者数百名に及ぶ
1886 (明治19)年	吉島村にコレラ発生糖ノ目に伝播、患者数百名に及ぶ
1895 (明治28)年	コレラ病発生、死亡者多し

②

「明治12年(1880年)、全国に『コレラ』流行し、患者16万人と称せられる。米沢に流行したるは同年旧盆頃にして大豆の熟する頃に始まり、桃の熟する頃閉塞したりとの事なれば、其時間は2、3ヶ月を出でざりならん。最初白布高湯に発生し、下流の三沢村大字小野川及赤芝に伝染し、終に米沢市内に蔓延す。死者数百名に達し、東は八幡原、西は成島禿ノ下に死骸を埋む。人民は衛生思想に乏しく、無経験の為、「コロリ追い」として藁人形を造り、町外れにて之に鉄砲を打かく。又葬列の通るを拒み、人々棺を手にして之を遮るなどの滑稽あり、市中物騒なりき。而して、地方民が「コレラ」を恐怖することを甚しく、路往くにも石炭酸を浸したる布片を鼻にあつるを常とせり。又同病に罹り死亡したる者ある時は通知を出さず、骨肉親近者のみにて形許りの葬式を営み、固より棺も無く味噌桶などに詰めこみ、棒などに吊して行く始末なりしと。修憲たる光景想像に余りあり。」

参考『米沢市史』(1944)

「第13章衛生及保健第2節悪疫の流行と其施設」 P 946

③ 六道銭

入棺のとき、死者の首から掛けた頭陀袋に収めて、死者とともに埋葬または火葬する銭。死者が三途の川を渡るときの渡し賃だとする解説が、広く行なわれているが、金属片を身辺におく鎮魂呪術の変形と考えられる。銭は6文、7文、3文、ときに49文を入れるところもあって一定しない。明治の頃まで穴あき銭が多く使われた。銭の形に切った紙片を入れる者も多いが、これは紙銭を焼く中国の風習を取り入れたものかもしれない。

「世界大百科事典」卷32

④ 六道

地獄趣、餓鬼趣、畜生趣、修羅趣、人間趣、天(上)趣の六趣をいう。人間はこの六道の間を輪廻しているという。

この信仰は藤原時代末ごろから、鎌倉時代を通じて流行しており、この思想による絵巻物なども制作されている。この考えによって、六觀音、六地蔵などの信仰が発生し、六道辻などの言葉も使用されている。

「日本歴史大辞典」卷19

第16章 No.30・31（上竹井境A・上竹井境B）遺跡

1. 遺跡の概要

No.30, 31 遺跡は本遺跡の東方 200 m 山裾に沿って北下する梓川（天王川）によって形式された梓川扇状地の末端部、標高 251 ~ 257 m に位置する。遺跡付近の地形は東側から北西に傾斜する梓川冲積河岸段丘の微高地でその中には原野ならび畑、ぶどう園、雜木林、松、杉林等が続く。

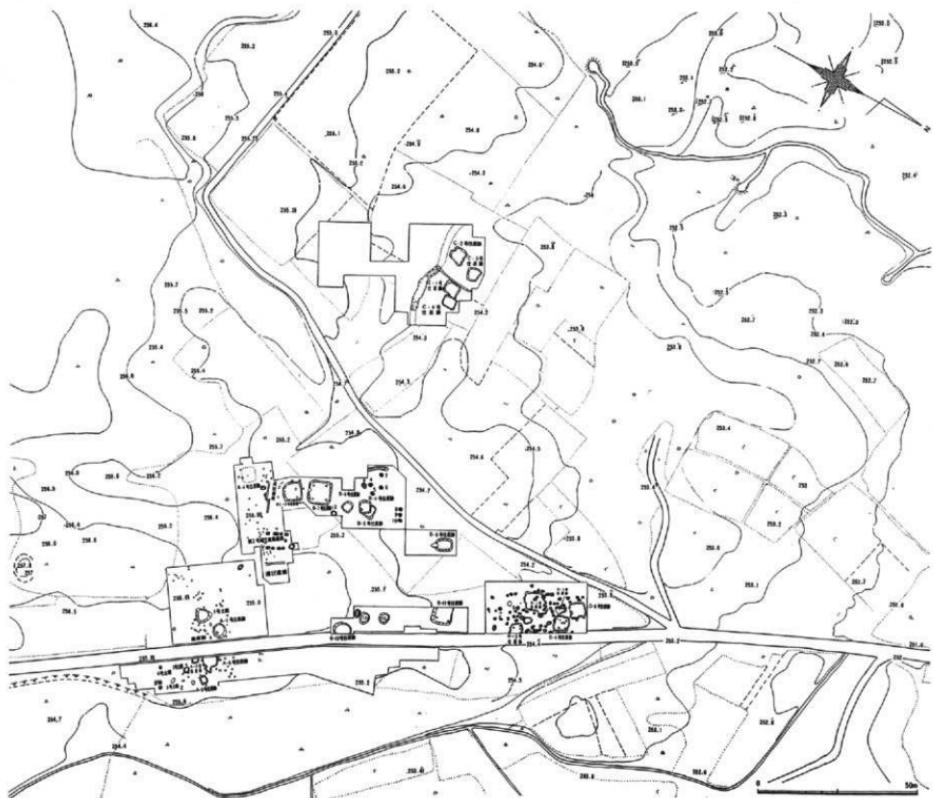
遺跡の発見は昭和 46 年 7 月筆者によって発見され、翌年の昭和 47 年 8 月に正式発掘調査を実施している。^① その時の調査は縄文後期の遺物を併出する地点を中心に調査したものではあったが、予想以上の成果を残して終了する事が出来た。^②

その後昭和 48 年に入って、県文課による分布調査が行なわれ、縄文の遺物が併出する地点を中心に No.31（上竹井境 B）遺跡、おもに奈良～平安等の遺物を併出する地点 No.30（上竹井境 A）遺跡と大別し、微高地の中でも直接的に影響が及んだものと考えられる北東部約 17,700 m²（No.30, 31）と推測されていた。ところが昭和 50 年度の No.30, 31 遺跡（八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査）発掘調査の結果、No.30 遺跡とは密接に連続していることが分り、遺跡面積も微高地一帯の範囲内に加わるものと判明。遺跡面積も一気に 90,000 m² を呈するものとなつた。むろん八幡原遺跡群の中では最大規模を誇る。また本遺跡の西方 200 m では隣接する様に別の新遺跡（No.45 と称名する）も発見され、遺跡面積 50,000 m² を有する縄文晚期の遺跡であるものと分った。^③

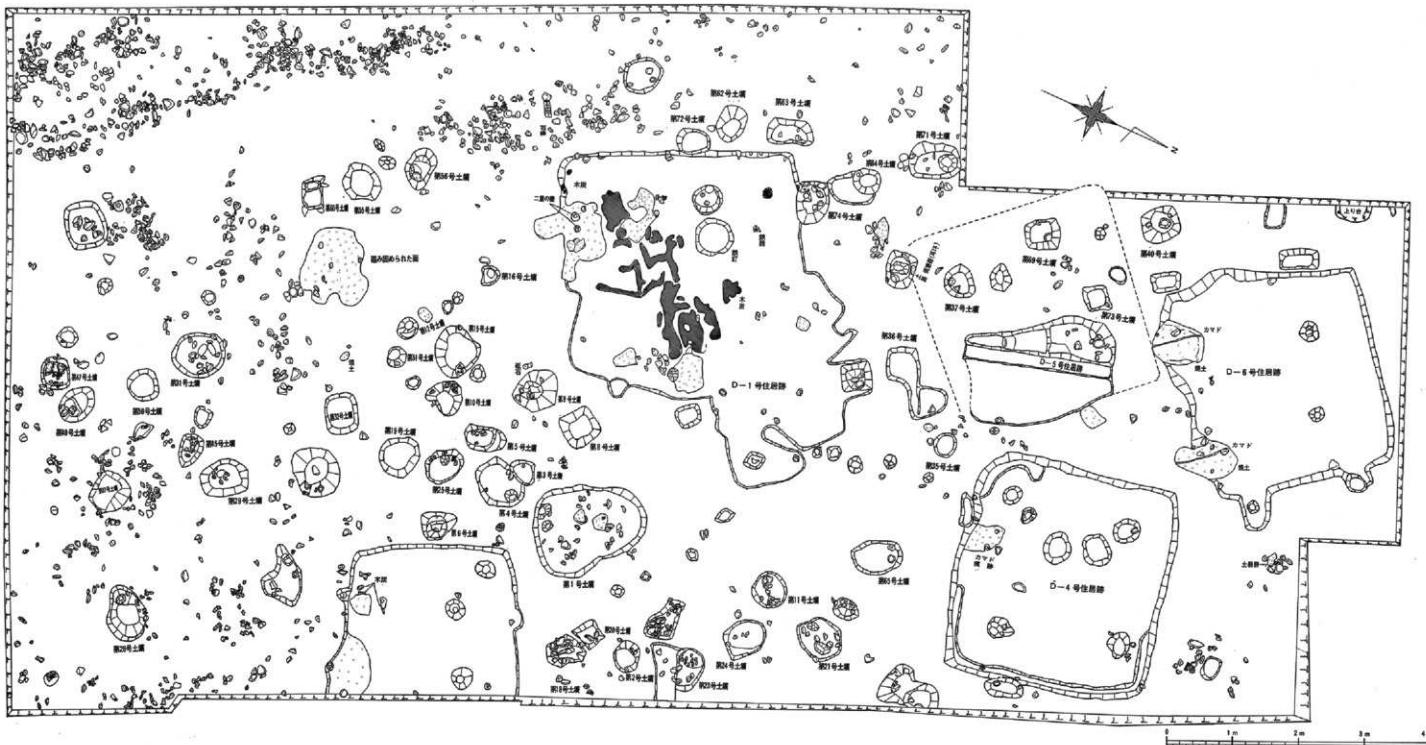
2. 調査の経過

昨年度（昭和 50 年）は 2 × 2 m グリッドを基本とする調査方法を取って結果的にみて良好な方法とは言えなかった。例えば住居跡が実存するにもかかわらず、すっぽりとグリッドが住居跡の中に入ってしまうという様な事も所々にあったため、今回は遺構を確実に上面で把握するという主眼で、4 m グリッドを主体とし、昨年度の西側まを中心 11,200 m² を設定した。（第 図版参照）

また場合によっては重機を使用しての調査も必要に応じて行った。調査区域がかなり広範囲に渡っているため、便宜上 A, B, C 区の 3 地区に分けて調査を進めその区間で検出された遺構、遺物は、（例）A 区 - 第 1 号住居、C 区 - 1 号土壙、B 区 - B - 5 - 3



第62図 八幡原No 30, 31 遺跡構配図



第61図 八幡原No.30, 31遺跡D区遺構全体図

図 版



▲1 発掘前状況



▲2 発掘状況



▲1 円形石製品出土状況



▲2 発掘状況遠景



▲1 発掘状況



▲2 F-12 区東壁面セクション



▲1 発掘前状況



▲2 発掘状況



▲1 発掘状況



▲2 発掘状況



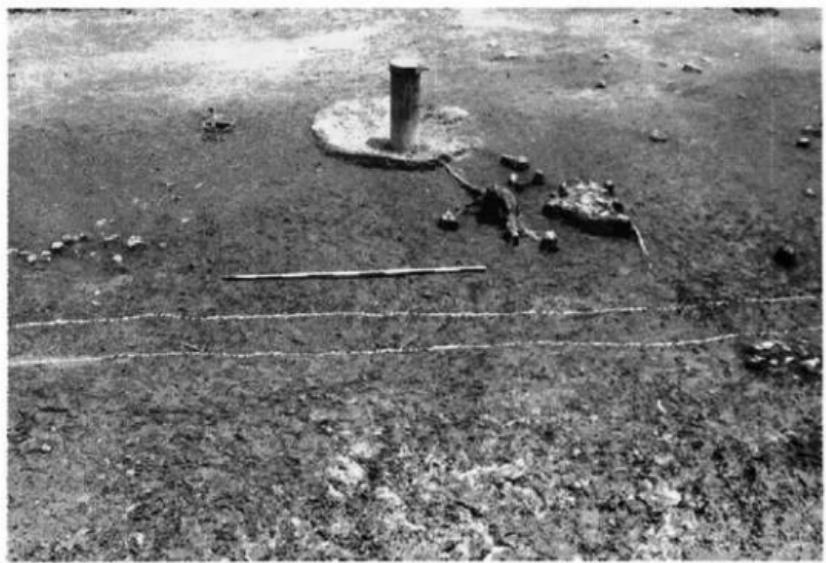
▲1 8-A～D区西壁セクション



▲2 同上 全景



▲1 B 土壙群確認状況



▲2 溝状造構確認状況



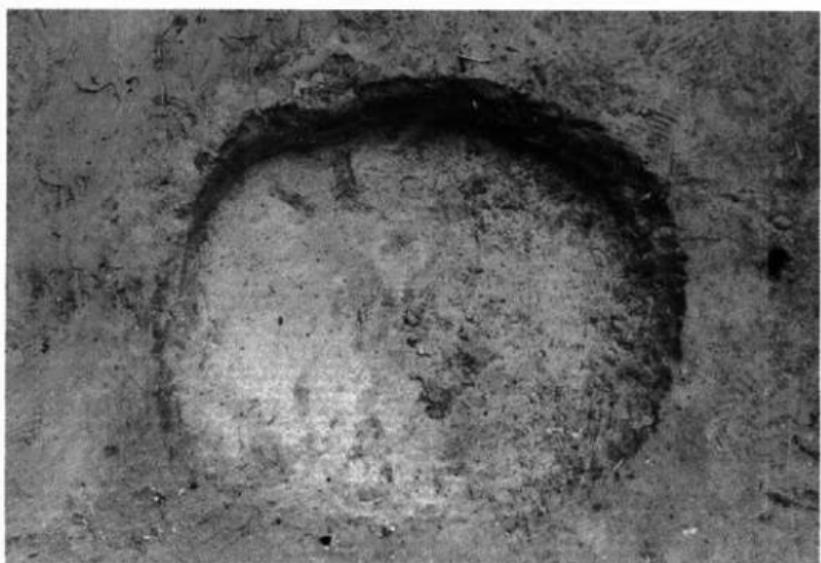
▲1 第6号土壤断面



▲2 第6号土壤 完掘状況



▲1 第7号土壤断面



▲2 第7号土壤完掘状況



▲1 第9号土壤断面



▲2 第9号土壤完掘状況



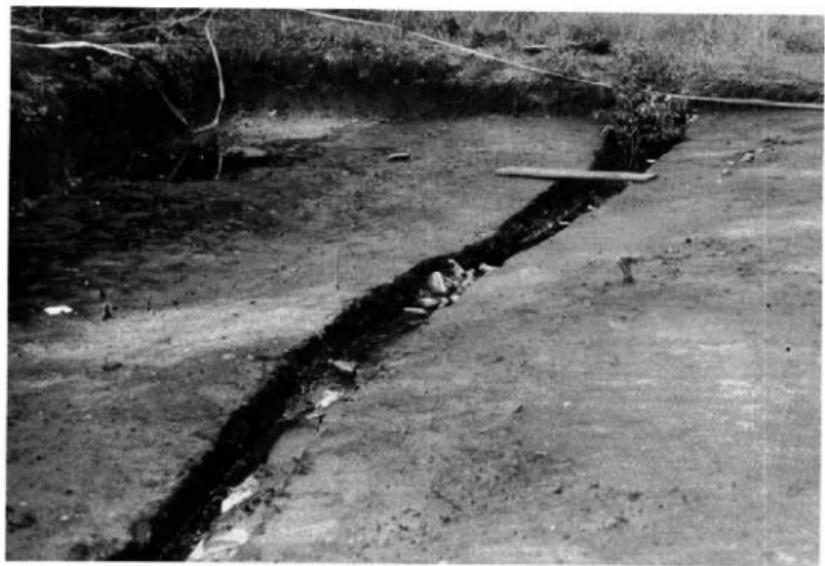
▲1 第11号土壤断面



▲2 第11号土壤完掘状況



▲1 溝状遺構確認状況



▲2 溝状遺構完掘状況(その1)



▲1 溝状造構完掘状況(その2)



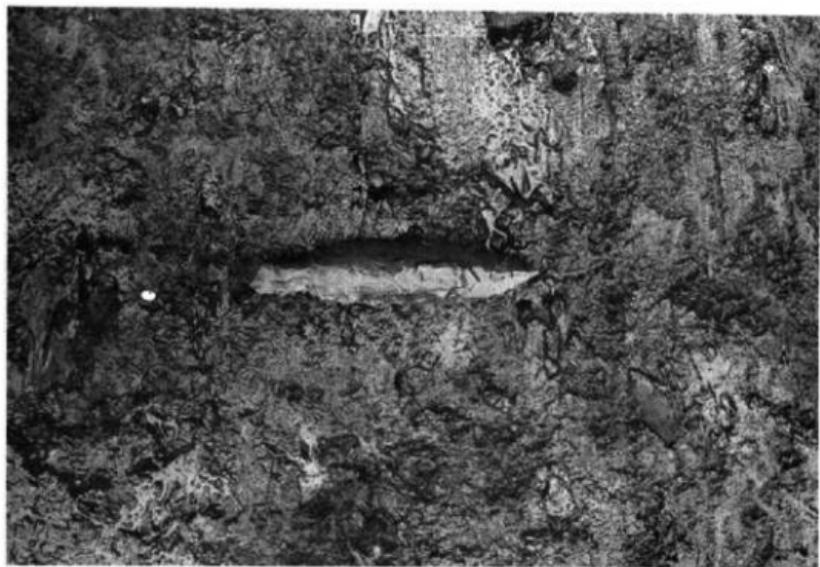
▲2 溝状造構内集石



▲1 石器出土状況（C-5区第3層No.9）



▲2 同上（C-8区第5層No.12）



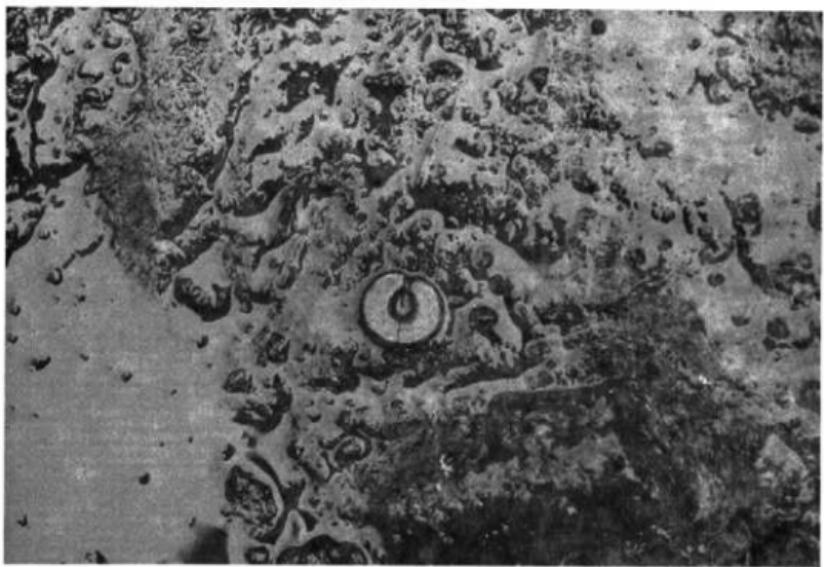
▲1 石匙出土状況（C-6区第3層No.1）



▲2 同上（C-5区第3層No.2）



▲1 石槍出土状況（B-7区第5層No.5）



▲2 土製耳飾り（C-5区第11層No.1）



▲1 フレーク群出土状況(C-8区第2層下)



▲2 同上 出土状況



▲1 フレーク群出土状況 (C・D-7・8区, 2層下)



▲2 フレーク群内の石棒出土状況